

氏名	中 尾 友 則
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	学 術
学位授与番号	博甲第1592号
学位授与の日付	平成9年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	梁漱溟の中国再生構想 ——新たな仁愛共同体への模索——
論文審査委員	教授 岩間 一雄 教授 小畑 隆資 教授 谷 聖美 教授 石田 米子 信州大学教授 後藤 延子

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、現代新儒家の巨擘梁漱溟に関する研究である。梁のきわめて特異な儒教解釈とその中国再生構想とを統一的に把握することを目指し、従来の梁研究の水準を大きく一歩前進させようとする研究である。以下、その内容の概要を示す。

梁漱溟（1893－1988）は、清末官僚の家に生まれ、新式学校に学び西欧近代文明の影響下に生い育った。中国近代化の指向は、梁にとっては、ほとんど生来のものとさえいえるのであるが、意外にもあの中国近代化の呼び声が澎湃として起きる五四において、梁は儒教精神の復興者として現れる。

梁の中で、西欧近代思想と儒教精神とは、どのような関係にあるのであろうか。これまでの梁研究は、梁の中のこの二つの相対立する思想の連関を問うてきた。そして、欧米における研究も、欧米在住の中国人による研究も、そして大陸における研究も、それらは、いずれもそれを梁における矛盾、ジレンマ（G. アリトー）として、理解してきたといつてよい。

本論文は、そうした研究状況に対して、疑問を提起する。すなわち、梁においては、西欧近代思想にたいして一定の批判がなされるとともに、儒教に対しても一定の批判と再構築（「読み直し」）がなされており、両者は、近代思想・儒教精神いずれをも乗り越えた新たな思想的な地点において、総合統一されているのではないかというのである。

本論文は、梁の思考を次のように捉える。梁は、西欧近代思想の核心を自由と平等においてとらえ、個々人が自由で平等であることは、「論証を要しない（自明の理）」と考える。そこに、梁における西欧近代思想への評価をみることができる。と同時に、梁には西欧近代思想の限界に対する批判がある。すなわち、梁によれば、西欧近代思想には「自己本位」の競争的態度があり、そこから、対外侵略・階級対立・精神的空虚が結果され、そうした近代思想が、無批判に中国に導入されるならば、西欧近代においては「自己本位」であっても社会性の発達がその限界の露出に一定の歯止めをかけるのに対して、社会性の発達に乏しい中国においては、目をおおわしめる惨状を生む。西欧近代思想の個人の尊重（自由・平等）は、中国にとって無条件に必要である。しかし、自己本位の競争や闘争的な態度は否定される必要がある。そして、中国思想の伝統である儒教精神こそ、この自己本位の競争・闘争を抑止して、個人間の共同を生み出すことができるというのが梁の基本的な思考である。

梁によれば、儒教とは、相互に相手を尊重し高めあう共同的な愛の精神である。こうした儒教理解の中に、梁における儒教精神の明白な再構築（読み直し）を看取することができるだろう。すなわち、儒教とは、もと血縁的な愛を核心とするものであり、そこにおいては、人は血縁的な閉鎖的な枠によって隔てられ、また、血縁的上下の枠の中に位置づけられ、下のものは上のものに対する無条件の恭順を要求された。宋以降の新儒教においては、個の主体性が肯定されるに至ってはいるものの、なお上下の枠からは解放されなかった。これに対して、梁の説く儒教精神とは、上下の枠からも血縁の枠からも解放された、人類普遍の共同精神であり、その共同の内実は、あたかも家庭内の情愛に等しいものだ

いうのである。この儒教精神によって、個人の権利の一方的な主張が和らげられ、共同的な秩序が生まれるとされるのであろう。およそ以上が、本論文の梁漱溟理解である。

だが、こうした愛の共同性の学説は、現実化されたときには、結局「乏しきを憂えず、等しからざるを憂う」式の古い平均主義的傾向を免れないのではないかという疑問が生まれる。本論文は、梁の鄉村建設論に端を発する中国再生構想を検討することによって、こうした疑問に答えている。

梁の中国再生構想のポイントをなすものは、本論文によれば、中国的範疇ともいえるべき擬似的小営業である。もともと小営業とは、西欧近代の起点にたつ存在である。旧中国にも、外見上これに類似する自作農層があり、それを基盤として、明清以来の商業生産の発展があった。だが、その内実は、西欧近代のそれと大きく異なる。思想面でいえば、そうした状況の下で、明清期の中国には、中国のルソーと称せられる黄宗羲らの思想も生まれるのであるが、その理想とする政治体制は、郷紳制を根底に置くものであった。郷紳制とは、商品生産を包含するに至った封建的な地主制である。西欧近代の小営業が、近代資本主義の担い手として、旧体制を破壊して近代社会を生み出すのにたいして、ここでの商品生産は、地主制と結合する。明清期の商品生産は、地主制と結合する商品生産であり、その主体こそいうところの擬似的小営業である。

中国革命期の中国農村の生産力的主体は、依然としてこの擬似的小営業であり、この生産力を展開させつつ新しい共同体的関係を樹立することこそ中国再生の根本的課題であった。そして、本論文は、中国農業革命に際しての、毛沢東と梁漱溟との対立の根底にあるものが、実にこの中国農業革命の課題の核心を把握したものとそうでないものとの対立であることを明らかにする。

すなわち、毛沢東は、中国的範疇である擬似的小営業をもって資本主義と解し、資本主義をもっぱら粉碎の対象とした。擬似的小営業の地主制に寄生する前期的性格（権力寄生的で古い宗族と結合するような）だけをみる毛沢東にとって、資本主義にとるべきところがないとされるのも当然であろう、というのである。

それに対して、梁漱溟は、この擬似的小営業たる自作農層のなかに、そうした限界と同時に、生産力的性格をも看取する。そして、梁にとっての中国再生とは、実にこの自作農の生産力を引き出し、それを波頭として、貧農層の生産力の上昇を促そうとするとともに、その前期的な利己的特権的性格を否定し、これを普遍的な愛の共同体へと転轍させることであった。梁においては、毛におけるような農業集団化は否定される。彼は一貫して、農民個人の責任において営まれる農業経営を提唱している。文革期の激しい迫害にもかかわらず、彼の基本構想は堅持されたとみることが出来る。以上が、本論文の梁漱溟の中国再生構想把握である。

そして、この梁の中国再生構想として具体化された彼の仁愛共同体が古い平均主義を越えたものであり、この梁の仁愛共同体こそ、中国社会に底深い調和的な発展と真に民主的な関係を実現するための基本的な視座を提供するものであり、また、過度の自己本位主義の克服を目指す現時のコミュニタリアンの思想に対しても、一定の示唆を与えるのではないか、というのが、本論文の下す結論である。

## 論文審査結果の要旨

筆者は、1987年、『歴史学研究』（第570号）に「黄宗羲の工商本業論」を発表して以来、これまで特殊中国的な「擬似的小営業」論を基本視角とする中国近代思想史研究に携わってきている。本論文は、そうした彼の研究の集大成ともいえるべきもので、現代新儒家・梁漱溟における西欧近代思想と儒教精神との思想内的連関を解明し、その統一的把握を果たそうとするものである。

審査委員会は、本論文を詳細に検討した結果、次の諸点を高く評価した。

- (1) これまでの梁漱溟研究を丹念にフォローし、特にアメリカ、大陸、台湾での諸研究を詳細に検討している。それらの整理と問題点の指摘は明快であり、本論文の課題設定は説得的である。
- (2) 本論文が対象として取り上げた梁漱溟の文章は、「独学者に特有の晦渋な文章」と評されているように、専門家にとってもきわめて難解なものであるが、本論文ではその難解な文章が自在によく読みこなされており、筆者のなみなならぬ力量がうかがわれる。
- (3) 梁漱溟の著作は、現在大陸において刊行中である。なかでも梁の文革期の作『理性の国』などは最新刊行のものであり、日本の梁漱溟研究のなかでは、未だほとんど利用されていない。本論文においては、梁漱溟の文革期における中国再生構想の検証のために、この作品がフルに活用されている。本論文における『理性の国』の研究は、日本の学界での

最初の本格的な研究として評価することが出来る。

(4) 筆者による梁漱溟思想の分析についても、原始儒家・宋明儒教についての筆者の永い研究蓄積に支えられて、これまでの梁漱溟研究がもっとも弱かった梁の儒教思想＝仁愛共同体の解明に力を注ぎ、それが、古き血縁的共同性や上下序列的な封建的共同性を克服したものであり、そのことが西欧近代思想（権利・自由・平等・民主主義）との結合を可能にし、梁の仁愛共同体が、中国再生構想の思想となり得るものであったことを明らかにし得ている。

(5) 以上の分析を通じて、本論文は、中国革命の諸過程における毛沢東と梁漱溟のいわば体系的な相違を明らかにすることによって、中国革命史を見通す新たな視点を提供するものとなっている。

また、審査委員会で本論文の問題点、および今後の課題について、次のような指摘があった。

(1) 何故に梁は、儒教の名に固執するのかという問題。この点は、梁の思想的課題が常に現実的実践的な課題であったことと無関係でないであろうが、この点の検討が望まれる。

(2) 権力観・階級観の転換の問題。本論文においては、梁の中国再生構想という点に論点限定され、この点についての言及が希薄であるが、梁における階級観と権力観の思想的転換との連関の下に再生構想が提示される必要があり、この点の補強が望まれる。

(3) 擬似的小営業の中国革命段階での具体的分析。梁の再生構想からすれば、その古い道教的な民間信仰や土工法的技術から、近代的合理的なエートスと技術基盤への転轍が不可欠なはずであり、その点についても検討することが望まれる。

以上を総合的に判断して、審査委員会は、本論文を、博士の学位論文に値するものであると認定した。